万年筆の旅

吉村昭 記念文学館 準備室ニュース vol.3

平成26年3月31日発行
登録番号(25)0047号-02
編集・発行／
荒川区教育委員会
問合せ／
荒川区教育委員会事務局
社会教育課文学館調査担当
〒116-8501
東京都荒川区荒川2-2-3
TEL.03-3802-4976
題字／津村節子氏
切絵／山﨑達郎氏

展示のお知らせ

全国文学館協議会共同展示 第2回
「3.11文学館からのメッセージ―天災地変と文学」
〈三二企画展 作家 吉村昭と災害の記録 ―吉村昭が示した防災と減災―〉

場所：日暮里図書館2階 吉村昭コーナー
会期：平成26年2月21日（金）～6月18日（水）

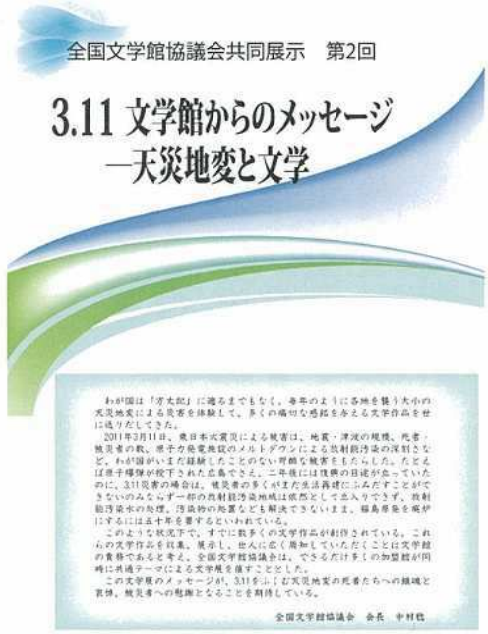
吉村昭氏は、『海の壁 三陸沿岸大津波』（中央公論社、昭和45年〈後改題『三陸海岸大津波』中央公論社、昭和59年〉）や、『関東大震災』（文藝春秋、昭和48年）において、自然災害の実態を克明に綴りました。

そして、防災・減災についての見解を深め、過去の災害に学ぶ重要性を、著作や講演で幾度も語りました。それは、後世への教訓となるべく編纂された郷土資料を徹底調査し、自ら取材調査に歩き、体験者の声を直接聞いた実感に基づくものでした。

平成23年（2011）3月11日に発生した東日本大震災は、未曽有の被害をもたらし、3年の月日が経過した今なお、困難な問題に直面しています。多様化する社会を見据える著者のまなざしは、自然と共生する人間の行動や、社会の在り方を問いかけています。

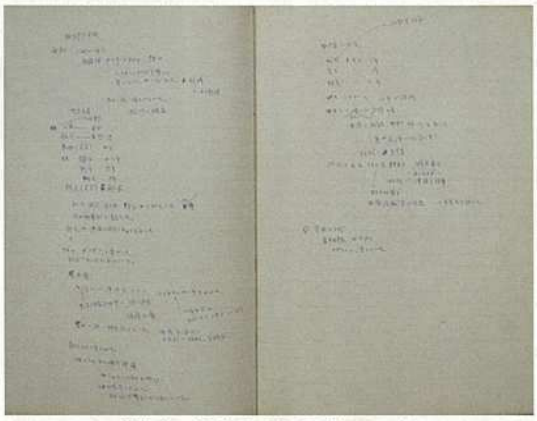
本展では、『海の壁 三陸沿岸大津波』に関する直筆取材ノートや、同書の参考文献である『田老村津浪誌』の他、関東大震災や阪神・淡路大震災の火災被害に言及し、防災意識について語った講演録、関連著作などをパネルで紹介しています。

なお、本展は、全国文学館協議会共同展示第2回「3.11文学館からのメッセージ―天災地変と文学」の一環として開催しています。この共同展示は、全国文学館協議会加盟館が、記憶の風化を防ぎ、震災を今日の問題として考えるため、災害を経て復興へと歩みを進める文学の姿をテーマとし、同時期に一斉開催するものです。ぜひご覧ください。



主催：全国文学館協議会　本展は、全国文学館協議会加盟館が共通テーマのもとに展示を同時開催する企画です。各館の展示概要およびスケジュールは裏面の一覧をご覧ください。

全国文学館協議会共同展示 第２回
「3.11 文学館からのメッセージ
―天災地変と文学」



直筆ノート〔戦史・津波等関連取材ノート〕
吉村昭コレクション
「二　昭和八年　子供の眼」（『海の壁　三陸沿岸大津波』）に関する吉村氏の直筆取材ノート。

展示報告

平成25年度吉村昭パネル展「作家 吉村昭と雑誌 ～誌上にみる作品世界～」

会期：平成26年1月11日(土)～30日(木)

吉村昭の作品は、虚構性をもつ短篇小説や、丹念な証言収集や資料調査に基づく中篇、長篇小説、自身の少年時代や日常、創作の裏側を描いた随筆など多岐に渡ります。

このような吉村文学の源には、同人雑誌での執筆活動があります。その後、作品発表の舞台を総合誌や文芸雑誌へと移し、文壇に登場しました。

本展では、雑誌初出作品に焦点を当て、同時代の作家や雑誌に関わる人びととの出会いを経て、多様性に富む奥深い作品が、どのように誕生したのか、当時の文学界を物語る掲載誌とともに、直筆原稿、関連資料など26点をパネル展示し、吉村文学の軌跡を紹介しました。

【展示風景】荒川ふるさと文化館エントランス

〈Ⅰ 同人雑誌から文芸雑誌へ〉

吉村は、昭和25年（1950）に入学した学習院大学で、津村節子氏とともに同人雑誌『學習院文藝』（後改称『赤繪』）へ作品を発表。以降、6誌の同人雑誌で活動を続けます。なかでも丹羽文雄が主宰する第二次『文学者』（昭和33年～同49年）で得た著名な作家や同人の批評は、吉村文学の展開に影響を与えました。昭和33年7月、同誌に発表した「鉄橋」は、自身初の芥川賞候補作となり、加筆修正後、総合誌『文藝春秋』（第37巻第3号、文藝春秋新社、昭和34年3月）に転載され、文壇への出発点に立ったと感じます。しかし、その後、昭和37年にかけて、4度の芥川賞候補となるも受賞には至らず、また、文芸雑誌『文學界』に初掲載された「貝の音」（第13巻第9号、文藝春秋新社、昭和34年9月）は、思うような反響が得られなかったことから、『文学者』への投稿を地道に続けました。そして、昭和38年、道の険しさを痛感し、会社勤めと創作活動の両立に踏み出します。

ここでは、『文学者』終刊記念号から、大河内昭爾、瀬戸内晴美など戦後の文壇を導く同人らとともに掲載された吉村の記述を紹介し、同誌の存在が、いかに重要なものであったかをご覧いただきました。また、直筆原稿「私の文学的自伝（十）―小説を観る眼―」（加筆後『私の文学漂流』所収、新潮社、平成7年）より、第46回芥川賞候補となった「透明標本」（『文学者』第40巻第9号、昭和36年9月）に関する、選考委員の丹羽文雄、佐藤春夫、河上徹太郎による選評を記した箇所を展示。作品の特色を評価した佐藤の言葉が、用紙上部の欄外に書き加えられていることを紹介しました。

〈Ⅱ 作家としての転機～「星への旅」と「戦艦武蔵」～〉

昭和40年、吉村は作家としての転機を迎えます。会社勤めの激務から、創作意欲を失った吉村は、岩手県下閉伊郡田野畑村島越を訪ねます。三陸沿岸の自然環境に魅せられ、同地を舞台に「星への旅」を執筆、第2回太宰治賞を受賞しました。同作は、昭和41年8月、『展望』（通巻第92号、筑摩書房）に受賞作として掲載されます。過去に芥川賞候補となるなど、すでに存在を知られていた吉村が、受賞により、再び注目を集める姿を「受賞のことば」に記された吉村の決意とともに紹介しました。

一方、420枚もの長篇「戦艦武蔵」は、同年9月『新潮』（第63巻第9号、新潮社）に一挙掲載され、単行本化の後、ベストセラーとなります。それは、吉村が、『プロモート』に連載していた「戦艦「武蔵」取材日記」（No.20～No.24、日本工房、昭和41年3月～同42年5月）を当時の『新潮』編集長、斎藤十一が読み、小説化の可能性を見出したことに拠ります。従来の短篇小説と異なる分野に戸惑いを感じながらも、小説化を決意した吉村は、長崎をはじめ、各地を取材し、「武蔵」関係者への徹底した証言収集、資料調査を行いました。

それらは、「戦艦「武蔵」取材メモ」として残されています。

その中から、昭和41年3月10日、戦艦「武蔵」建造技師であった杉野茂氏への取材内容が記された箇所を展示しました。吉村は、設計室や進水式の様子を細かな図で表しています（写真1）。「武蔵」建造の機密保持が徹底していたことを実感しながらも、丹念に個々の証言を繋ぎ合わせ、資料調査を繰り返し、その全貌を描いた過程を紹介しました。

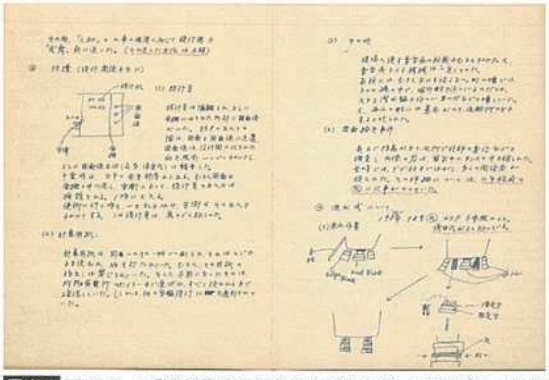


写真1 直筆ノート「戦艦「武蔵」取材メモ（その2）」 津村節子氏蔵

〈Ⅲ「竹の節」と短篇小説〉

「戦艦武蔵」以降、吉村は、記録性に富む中篇、長篇小説を発表する一方で、『群像』や『文學界』、『文藝春秋』、『新潮』などの各誌で、自身の原点でもある短篇小説に取り組み続けました。取材調査に基づく長篇の手法と通じる面を持ちながらも、虚構を織り交ぜ、独自の味わいを生み出す短篇を創作し、後に、短篇集としてまとめました。

『碇星』（中央公論新社、平成11年）の「あとがき」では、短篇の創作を「絶対に必要不可欠」であり、「いわゆる短篇小説は竹の節に似ていて、それがなければ竹幹である私の長篇小説は、もろくも折れてしまうだろう」と記し、長篇と短篇の関係性を語りました。

昭和49年1月、『群像』（第29巻第1号、講談社）の短篇創作特集に、「時間」を発表。結核による闘病体験を投影し、生命の深遠を見つめた初期短篇小説の作風は、さらに広がりをみせ、同誌では現代小説を中心とした短篇を発表。昭和58年4月に掲載された「冬の道」（『群像』第38巻第4号）は、終戦後、父を亡くした際の体験を基に創作されました。同作の直筆原稿を展示し、原稿用紙一枚の中に約十枚分を収める吉村独自の推敲過程をご覧いただきました。

〈Ⅳ 史実を追う長篇小説〉

昭和40年代後半から、吉村は、誌上で長篇小説の連載を開始します。吉村は、航海中に遭難し、奇跡的に帰国した船乗りらの体験を記録した漂流記に関心を寄せ、海をめぐる作品を多く執筆したほか、史実に埋もれた人物の実像と功績を明らかにした歴史小説を各誌で連載しました。

ここでは、昭和50年以降、徹底的な資料調査に基づき執筆された歴史小説を中心に紹介し、総合誌『世界』（通巻439号～455号、岩波書店、昭和57年6月～同58年10月）に連載された「破獄」の直筆原稿、「花渡る海」掲載誌『海』（第15巻第10号～第16巻第5号、中央公論社、昭和58年10月～同59年5月）などを展示しました。

〈Ⅴ『季刊文科』編集委員としての活動〉

平成8年（1996）以降、吉村は、『季刊文科』の編集委員を務めます。『季刊文科』第1号（紀伊國屋書店）は、大河内昭爾を中心に、『文学者』の同人であった吉村と秋山駿、そして『文學界』の同人雑誌評を務めた勝又浩、松本徹、松本道介の6名を編集委員として、平成8年7月に刊行されました。

同誌創刊の発案者である大河内昭爾と吉村の交流や、創作や評論、名作再見の欄とともに、全国の同人雑誌を取り上げる同誌の特色、創刊号に掲載された吉村の短篇「眼」を中心に紹介しました。大河内は、昭和33年、第二次『文学者』の評論グループに参加、吉村とは、互いの文学の本質を的確に指摘し合い、公私に渡る交流を育みました。それは、『季刊文科』第22号（北溟社、平成14年7月）に掲載された「吉村昭 大河内昭爾 対談 作家の運命 吉村文学の今と昔」にも顕著です（写真2）。歴史小説を中心に、初期短篇作品や、「戦艦武蔵」発表時の思い出などが語られており、両者の文学観を垣間見ることができます。

観覧された方々からは、「吉村氏の各分野に対する好奇心と情熱に感動した」、「吉村文学の歴史を振り返り、作品の成り立ちを理解することができ、興味深く面白かった」などの感想をいただきました。

写真2「吉村昭 大河内昭爾 対談 作家の運命 吉村文学の今と昔」（『季刊文科』第22号 北溟社、平成14年7月）

末筆ながら、本展を開催するにあたり、多大なるご協力を賜りました津村節子氏をはじめ、貴重な資料・情報をご提供いただきました方々、関係各位に深く御礼申し上げます。

〈深見美希〉

平成25年度 吉村昭パネル展 関連イベント

記念講演会 「吉村昭氏の歴史小説について」

日時：平成26年1月25日(土)14時半～16時
講師：中村稔先生（日本近代文学館名誉館長、詩人）

日本藝術院第二部長を務められた、詩人の中村稔先生を講師にお招きし、記念講演会を開催しました。

吉村が、幕末から開国に向かう激動の日本を生きた人びとの姿とその世相をどのように捉え、読者に示しているのか、明和7年（1770）から明治36年（1903）における歴史的事象とともに、『冬の鷹』『ふぉん・しいほるとの娘』『長英逃亡』『海の祭礼』『黒船』『桜田門外ノ変』『生麦事件』『天狗争乱』『彰義隊』の9作品を中心に、講師は作品世界を解説されました。

なかでも、『ふぉん・しいほるとの娘』に登場するシーボルトの娘、お稲は、不遇に負けない強い女性像として描かれていると指摘されました。そして、『天狗争乱』の天狗党をはじめ、不遇ながらも志をもった人びとに共感する吉村の視点について言及されました。吉村独自の歴史小説、その魅力を味わう時間となりました。

聴講された方々からは、「吉村氏の歴史小説を、より理解することができた」「改めて吉村氏による歴史小説の奥深い面白さを感じ、再読したいと思った」などの感想をいただきました。

〈深見美希〉

（上）『ふぉん・しいほるとの娘』上（新潮社〈文庫〉、平成5年）
（下）『ふぉん・しいほるとの娘』下（新潮社〈文庫〉、平成5年）

著作紹介
第2回

『戦艦武蔵』

『戦艦武蔵』
（新潮社〈単行本〉、昭和41年）
吉村昭コレクション

所員たちには、一つの確信があった。自分たちのつくっているこの巨大な新型戦艦が海上に浮べば、日本の国土は、おそらく十二分に守護されるだろう……と。かれらは、この島国の住民の生命・財産が、自分たちの腕にゆだねられているのだという、強い責任感に支配されていた。そのためにも、かれらは、一刻も早く、しかも完璧な姿でこの巨艦を戦列に加えたいという願いをいだきつづけていた。

かれらは、誰一人として手を休めている者はなく、千数百名の所員たちは、汗と油にまみれて作業に取り組んでいた。

それらの小さな人間の群れの中で、おびただしい量の鉄で組立てられた巨大な船体が、奇怪な生物のように傲然と横たわっていた。

（『戦艦武蔵』新潮社、平成21年改版）

『戦艦武蔵』とは　吉村昭の名前を一躍有名にした作品、それが『戦艦武蔵』です。昭和41年（1966）9月、雑誌『新潮』（第63巻第9号、新潮社）に一挙掲載、同月単行本化されると瞬く間にベストセラーとなりました。

小説の〝主人公〟である戦艦「武蔵」は、昭和13年に三菱重工業長崎造船所で起工されました。本作品は、「武蔵」建造過程を中心に、昭和19年10月24日、レイテ沖で沈没するまでを描いたものです。

執筆するまでの葛藤　昭和30年代後半、吉村は、結核で臥っていた友人の泉三太郎を見舞います。そして、戦艦「武蔵」の「建造日誌」を見せられ、日誌から、「戦時中のあの異常な程の熱っぽい空気がふき上げている」のを感じました（「あとがき」『戦艦武蔵』新潮社、平成21年改版）。吉村は、泉自ら執筆しようとしていた「戦艦武蔵」をテーマとして書くよう勧められました。

それまで、吉村は同人誌や文芸誌に短篇小説を発表していました。執筆姿勢は、「小説に於ける真実は、虚構の中にこそ求められる」（『戦艦武蔵ノート』岩波書店、平成22年）というものです。一方、「武蔵」をテーマに小説を書くことは、「事実を追わなければならぬ」ということで、自分の文学に対する考え方と相反するものとして葛藤します（『戦艦武蔵ノート』）。

しかし、「武蔵」建造に関わった技師たちへの取材を進め、昭和41年3月から、『プロモート』（日本工房）に「戦艦「武蔵」取材日記」を連載し始めます。この作品が雑誌『新潮』の編集長の目にとまり、戦艦「武蔵」の小説化を促されました。

そして、「四十年近い半生で最大の事件であった戦争をこの機会に書き、考えることは、決して無意味なことではないにちがいない」と書くことを決心したのです（『戦艦武蔵ノート』）。

取材の日々　小説化にあたり、吉村は、改めて建造に関わった技師や乗員に対して取材を行いました。長崎をはじめ、福岡や東京にいる関係者に直接話を聞くため、足を運んでいます。出会った人びとからもらった名刺は、70枚を超えていたそうです。

現在、津村節子氏のもとに、その取材に関するノートが4冊残されています（2面写真1）。吉村は、自分が造船技術について素人であることを認めていました。しかし、あきらめることなく、必死で、技術者たちの言葉を書き留めたことが、ノートから窺い知ることができます。

『戦艦武蔵』を通して　昭和2年生まれの吉村は、多感な幼少期に、日暮里で戦争を体験しています。『戦艦武蔵』では、自身の戦争体験を見つめ直し、「「武蔵」を媒介とした戦争と人間との関係」を描こうとしました（『戦艦武蔵ノート』）。

「戦争を根強く持続させたのは、やはり無数の人間たちであった」（「あとがき」『戦艦武蔵』）という意識のもとで書かれた本作品。戦後70年近く経ち、『戦艦武蔵』が発表されてからも、約50年経過しました。しかし、今なお色あせることなく、「戦争とは何か」という、深くて大きなテーマを私たちに問いかけています。

＜加藤陽子＞

直筆原稿「戦艦武蔵」　津村節子氏蔵
「戦艦武蔵」の冒頭部分。「戦艦武蔵」は、原稿用紙420枚にも及ぶ吉村初の長篇小説。推敲の跡が残る。

「吉村昭コレクション」とは、夫人である津村節子氏より荒川区にご寄託いただいた吉村昭氏旧蔵資料のことです。